

導 入									
新 版 K 式 発 達 検 査 を め ぐ っ て	そ の 5								
							大 谷	多 加 志	

発達検査を行う際、子どもと出会う場面つまり導入場面は最初の山場です。どんな表情でやってくるか、こちらの声かけに応じてくれるか・・・、検査の経験が少ない頃はとにかく緊張する場面でした。特に、初対面の子どもに検査を実施する場合は、多少の事前情報はあったとしても、予測の立たない部分が多くなります。その分、検査者がある場で臨機応変に対応しないといけなくなるわけで、負担を感じることもありました。

このように、当初は「なるべく平穏に過ぎてほしい」と願うばかりであった検査の「導入」場面ですが、多くの子どもと出会う中で、検査自体とはまた違った発見がある、注目すべき部分だと思えるようになってきました。

今回はこの「導入」をキーワードに、発達検査の意義について考えたいと思います。

子どもが泣き出した！

初心者の頃、導入場面で子どもに泣かれるというのは、最も困ることの1つでした。顔を見ただけ、部屋に入っただけで泣かれたら、この先検査なんてできるのだろうか・・・と不安に駆られました。平静を装

い、必死に取り繕った笑顔を子どもに向けながら、内心は声をかけていいか少し様子を見るのがよいかさえわからず、パニック状態でした。

そもそも、なぜこんなに焦ってしまっていたのかと言えば、「検査ができない」という状況を強く恐れていたためだと思います。検査不能という結果が、検査者としての適性がないということとイコールのように思えて、何とか検査を実施しようと焦り、応じてもらえないことにパニックになり、と悪循環に陥っていたように思います。

しかし、時には検査ができないという経験も何度か重ねる中で、一言に「泣いている」といっても、よく見ると子どもの様子や反応はまちまちだということに気がつくようになりました。開き直って、ようやく少し余裕が出てきたのかもしれません。

例えば泣いて母親に抱きついている時でも、よく見るとだっこされる腕の隙間から検査者に眼を向けていたりします。もちろん警戒感いっぱい視線でするので思わずひるみそうになりますが、こちらを完全にシャットアウトしているわけではないというところは、注目すべき点です。踏み込み過ぎて引かれてしまうリスクをなるべく避け

ながら、子どもの方から反応してくれるように誘いかけます。どこかで用具に手を出してくれたり、何か言葉を発してくれれば、多くの場合はそれが突破口になりました。

突破口はどこ？

突破口を探す時、焦りは禁物です。通常検査を行う時と同じように、検査者の関わりに対して子どもがどのように反応するかを丁寧に観察します。

検査者が提示した用具に手を出してくれればそれに越したことはないのですが、チラッと視線は送ったり、あるいは音には反応したりと、何らかの反応があれば脈ありというところまで。

興味がありそうなものが見つかれば、次は誘いかけです。手続き上許されている場合であれば、検査者が実際用具を扱ってみせるのも、有効な誘いかけの1つです。何を求められているかが具体的にわかりますし、人がやっているのを見ると“思わずやってみたくなる”という気持ちも働きやすいです。

また、微妙なところなのですが、子どもに見せる時の検査者のスタンスも、時に重要になってきます。検査者が例示し、子どもがその様子を見て実際に用具を扱ってくれればよいのですが、検査者が“見ててね”とアピールした途端、子どもが視線を逸らしてしまうこともあります。そんな時には、検査者はただ勝手に玩具で遊ぶかのように用具を扱って見せたりします。もちろん子どもが見ているかどうかはきちんとチェックしていますが、子どもに向けての直接の働きかけはせず、ただ「見せる」ことを重視します。

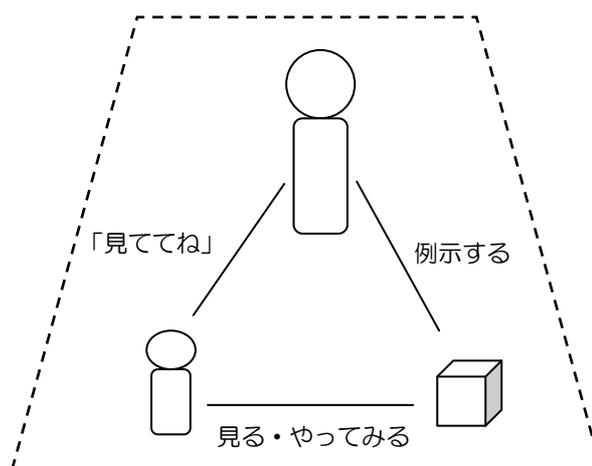


図1. 例示のやりとりと三項関係

人と人が何らかの物を共有する関係のことを「三項関係」と言います。図1は三項関係の図に、先程の例示のやりとりを重ね合わせたものです。三項関係は人と人のコミュニケーションの重要な基盤になるものですが、この三項関係に基づいて物と関わる時、背景にいる人（この場合、検査者）が強く意識されることとなります。まだ検査者と十分に関係が出来ていない場合、あるいはこのような三項関係を他者と築くこと自体が苦手な子どもの場合、この誘いかけではうまく応じてもらえないことがあるかもしれません。

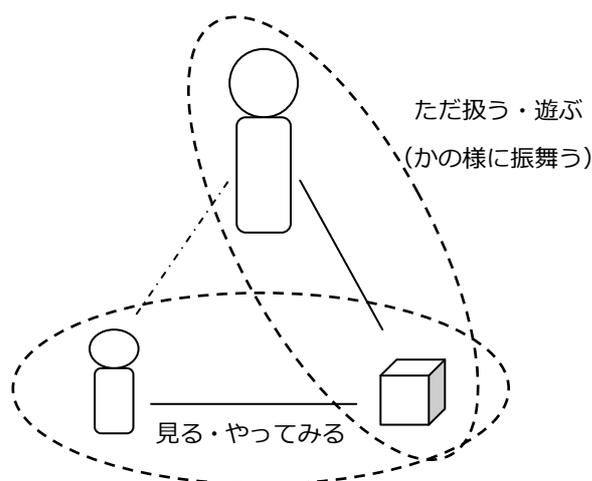


図2. 二項関係的な検査場面

次の図2は、「見せる」ことを重視した際の関わりを図式化したものです。「検査者と物」「子どもと物」の二項関係が組み合わさった形になります。検査者からの直接の働きかけがない分、子どもは純粋に課題に対する興味によって、やってみようという気持ちになりやすいかもしれません。

二項関係的な関わりの方が導入しやすかった場合、その関係性が後の関わりの中で変化していくかどうか、重要な観察のポイントです。検査者に慣れていくと三項関係で検査者と共感・共有することができるようになる場合もありますし、最後まで三項関係に基づくやりとりが難しい場合もあります。人との関わりのベースである三項関係のとり方がどのような様子であるかを知っておくことは、後の相談においても非常に重要になります。

人と場所

また「導入」にあたっては、誰が検査をするか、どこで検査をするかという、外的な要因も大きな影響があります。発達検査を

行う人と場所には、大まかに分けて2つのパターンがあります。

1つは普段からその子どもと関わりのある人が日常的に通う場所で検査を実施する場です。例えば療育施設の支援者が日頃関わっている子どもに検査を行うのは、これにあたります。もう1つは、初対面の人、なじみのない場所で検査を行うケースです。子どものことが心配になった保護者が、児童相談所や医療機関などに相談し、発達検査を受ける場合はこれに該当します。

一見すると慣れた人と場所で検査を実施する方がメリットがあるように思うかもしれませんが、初めての人や場所で適度な緊張感がある方が結果的によく取り組めたというケースもあり、一概にどちらがよいとは言えません。ですが、人や場所という外的な要因が、子どもにどのように影響したかは、考慮しておく必要があります。

遊び？お勉強？

次に、子どもが部屋に入って、いざ検査が始まるという場面を考えてみましょう。部屋には入り、席には着いたものの、子どもからするとまだ何が始まるのか「??」という状態かもしれません。“今からこんなことをするよ”という一定の説明を、検査者がする必要があります。どのような説明をするかは特に決まりがあるわけではありませんし、子どもの年齢や状態によっても変わってくるだろうと思います。

よくある声かけとしては「遊び」あるいは「お勉強」という説明があります。「積木とかカードとかがあるから、遊んでみようか」「積木で遊んだり、問題を考えてもらってお勉強みたいなこともするんだけど、いい

かな？」と言ったりします。

これも、特にこの声かけがよい、というものはありません。子どもの捉え方は様々で、「お勉強」と聞いた途端、「算数嫌いやー！」とすっかり意気消沈してしまう場合もありますし、「遊び」と説明されて自分の好きなように扱えると思って検査者の指示に全然応じてくれない、というような場合もあります。この場合は、その後どのように状況を捉え直したり、気持ちを切り替えていけるかを探っていくことになるでしょう。

転んでもただでは起きない

導入でつまずいたり、検査が完了できないという結果になることは、当然検査者にとって避けたい事態です。しかし、いつでも、どんな子どもでもスムーズに導入して検査が実施できるということは、あり得ないだろうと思います。どのように導入するのがよいか、準備と心構えをしながらも、思った通りにいかない時にも子どもの反応を丁寧に観ることで、1つでも役立つことを発見しようという「転んでもただでは起きない」姿勢が必要だと思います。